

樹芸樹木

樹木を使った景観の構成と、その保護管理方法を研究するために当科では具体的な項目として街路樹、公庭園樹、生垣に使用する樹種の選抜と造成方法、あるいは保護管理に関する諸問題について研究をすすめている。

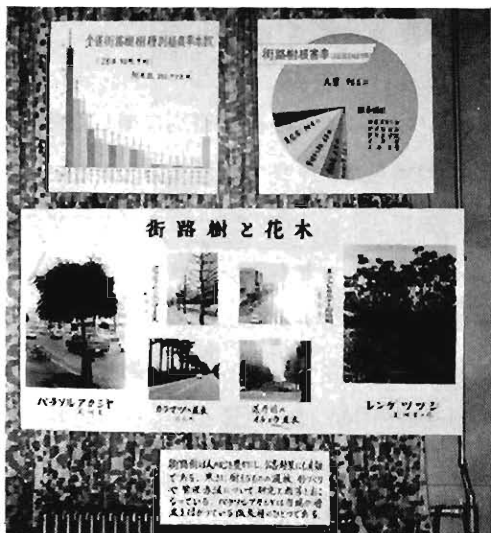
街路樹については道内外の樹種のなかから本道でよく生育できるようなものの選抜をおこなう。例えば寒さにつよくて、美しい花をつけるもので、きれいな実を結び、さらに形がよく秋の紅葉がすばらしいというようなものを対象とする。

公、庭園樹は花がきれい形でよく、公・庭園樹としてよく調和のとれるものとして選抜をおこなっている。

生垣に使う樹種は現在かぎられた種類であるが、そのほかにもかなり適樹があると考えられるので寒さにつよく、多雪地帯によく生育するもので刈り込みのよく大きく枝上りのしないものを目標にして選抜をおこなう。

当科でとりあげているテーマの対象樹木が、その目的を果たすまでには多くの災害がおこるので、それらの保護管理も地方の諸条件も考えあわせ、樹芸技術の実際として研究をすすめているが、以下それぞれの課題についてかんたんに解説をする。

街路樹について



写真一

樹木を列条に植えた姿を並木とよんでいる。街路樹もその一方法と考えてよい。街路樹という名は昭和7年東京都の訓例でいろいろの名でよばれたものを総合しつけられたものである。この街路樹もかつては農民の耕作地に通う「道しるべ」として植えられたものであるが、農民達はそこに植えられる木は主として果実のなるものを対象とした。木はそれぞれの季節に農民たちに楽しみを与え生活を助けてくれた。例えば、春は花を、夏は木陰を、秋には木の実を、そして冬は吹雪からまもるなどがあげられる。農道の街路樹はいつしか都市と都市を結ぶ役を果たすようになり、街

の中の生活の一部となった。そして街は、植えられた緑によって風格をたもってきた。しかし今では、都市には車と工場次第に緑が消え、人間も住みにくい汚れた街が多くなりつつある。

街路樹として有名なものにフランスのパリといえばマロニエ、銀座といえばヤナギがあるけ

れどマロニエはパリの市民によってよく管理されその風格をのこしているが、銀座のヤナギは消えてしまった。北海道の街路樹も残念ながら管理が不十分なため98%がなんらかの被害をうけている現状である。世界で街路樹につかわれている樹種は94種でかなり多いが、各国のうち日本は57種ともっとも多い。北海道は46種もの街路樹が植えられているけれど成績のよくないものがかなりあることを考えると、適樹でないものが少なくないように思う。北海道の街路樹を管理者別に植えられている状況を主な都市について示したのが表一である。

表一 街路樹管理者別植栽本数表

都市名	総本数	都市別比率	管理者別名		
			国道	道道	市道
札幌	28,102	42.2	3,946	2,908	21,248
函館	9,161	13.7	426	656	8,079
室蘭	3,933	5.9	149	599	3,185
苫小牧	4,320	6.5	872	336	3,112
岩見沢	2,735	4.1	1,066	96	1,573
小樽	1,344	2.0	341	210	793
旭川	4,192	6.3	1,270	818	2,104
帯広	4,113	6.2	883	940	2,290
釧路	4,940	7.4	2,036	580	2,324
北見	2,111	3.2	530	185	1,396
美瑛	1,683	2.5	1,198	122	363
計	66,634	100	12,717	7,450	46,467
管理者別比率	(%) 100		19.1	11.2	69.7

公・庭園用樹木について

冬期間のながい北海道で春の花は格別に美しく感じられる。なかでもエゾムラサキツツジがその代表といつてよい。コブシが咲き、次いで色の鮮やかなエゾヤマザクラの咲く頃は、北海道のもっともよい気候である。そして緑濃き夏がすぎナナカマドが真紅の実をつける。道内でもよく観察すると公・庭園樹として使える樹種がかなり多い。従来これらの樹木は種子の量とか、採取時期、あるいはまきつけや管理の方法などが明らかでなかった。このため従来は山どり苗木によるものが大半で量産というわけにゆかず、また生育地の多くが採取禁止区域内であるため、苗木や種子の入手も容易でなかった。最近自然保護を考えて、盗伐や山火の危険を防ぐため、国有林で一定の地域を限って苗木の採取を許可するようになったことは喜ばしいことである。



写真一 2

本道の厳しい気候を考えると、道内産のものが最も安定している。たとえばハクサンシャクナゲは5～6年生でかっこうな姿になって花もつけ、エゾムラサキツツジは4～5年生で花をつけるので、これらの道内産の花木類を大量に生産して、生活環境を花と緑で豊かにするため、養成方法や管理方法を明らかにしていきたい。

オレゴンシャクナゲの導入経過

抜群に美しい花をつけるオレゴンシャクナゲは、昭和39年に、オレゴン州知事一行が産業視察団として北海道を訪れた際、知事へのお土産としてもってきたものである。シャクナゲをお土産としたいきさつは、さきに町村知事が渡米したとき、オレゴン州知事の家に立ちよったところ、庭に赤、黄、白、紫のシャクナゲが見事に咲いていた美しさにうたれ、絶賛したことにはじまる。昭和39年11月11日、6品種各10本計60本のシャクナゲが知事公館に到着、安全を期するため国立林試札幌支場に各品種1本を分配、残り54本は当场で栽培することになった。11月14日、道庁前において贈呈式がおこなわれた。そのご凍害をうけ18本が枯死してしまったが、残ったものを母木として挿木増殖したところ、よく発根し64本の苗木がえられた。また受領当時のシャクナゲは高さも30cmほどであったのが、既に100～130cmにも達し42年に待望の美しい花を温室内でみる事ができた。昭和40～44年まで圃場での越冬をこころみたが、屋外での越冬はよほど十分な管理をしないと困難なことがわかった。



写真一三

昭和45年6月4日、伊達町の開拓記念館に48本が移植され現在よく生育している。また挿木により増殖した150本の苗木は当场の温室で元気に育っている。この美しいオレゴンシャクナゲの品種と特性は下記のとおりである。

記

- (1) ローダースホワイト(Loders White) — 葉は濃緑で楕円形、蕾はピンク、開花して白く

なる。

- (2) サッポウ(Sappho) — 葉は長楕円形で花は白に紫の斑がある。
- (3) イグナチウス サージント(Ignatius sagent) — 葉は黄緑、長楕円形で花はピンク。
- (4) ユニーク(Unique) — 葉は濃緑で楕円形、花色はレモン
- (5) ベター ワーマルド(Betty wohmald) — 葉は黄緑で大きな楕円形、花は大輪の濃ピンク
- (6) ジャン マリード モンタニュ(Jean maric de montagne) — 葉は濃緑で楕円形、花は輝やくほどの紅。

樹木の繁殖法について

樹木の繁殖法に実生、挿木、接木、分根、取木などがある。しかし、ほとんどの樹木は白から「繁殖はこのようにしてください」と教えてくれている。例えば種子のたくさんつけるものは種子で殖やすようにと、また分けつしやすい樹木は根わけで、さらに種子も少なく分根もできないものは挿木で殖やすようにという具合に樹木をよく観察すると自然とわかることである。花木類は挿木でかんたんに殖やせるものが多いけれど育種的には面白くない。その点、実生は交配によってとんでもない珍品がでる可能性もあるので魅力がある。

(樹芸樹木科)

大気汚染

工業地帯の地域分散化、交通機関の発達などにより、大気汚染の影響は一層広域化し、局地的な高濃度の汚染から広い範囲にわたる低濃度のものへと変わり、植物の被害も急性的な被害から、肉眼ではわからない慢性的被害が広域的に及ぶようになった。これらの大気汚染の現状と被害の実態をつかみ、被害の判定や、大気汚染に対する樹木の感受性、抵抗性などの研究を、特別研究員をチーフとするプロジェクトチームによってすすめている。



写真-1

被害の判定

被害を受けた樹木が、大気汚染によるものであるから判定するには、気象条件、立地条件などによってかなり異なり(1)外観的な症状、(2)化学分析、などを総合して判断する。植物は葉の

気孔から汚染物質をガス体として吸収し、植物体内に蓄積する。葉の中に蓄積された汚染物質を定量的に分析し、大気汚染の影響を調べようとするものである。このためには、植物体内に蓄積された汚染含量の変化と外観症状の発現過程を的確に把握しておく必要がある。このような観点に立って、実験的に種々のガスを樹木に接触させ、大気汚染被害判定の基礎的な事実をつかむため、種々の試験をすすめている。

大気汚染の種類と被害症状



写真-2

被害症状が最も顕著に現われるのは葉であるが、汚染物質によって葉の細胞が破壊され、葉面に煙斑、あるいは葉形の変化などが引き起こされる。汚染物質の主なものとして、亜硫酸ガス、フッ素化合物、塩素、オキシダ

ント、アンモニア、などがあり、汚染物質の種類により被害の症状もそれぞれ違いがみられる。

亜硫酸ガス

亜硫酸ガスの発生源は、燃料として使われる石油や石炭に含有する硫黄にあるが、これらを使用する火力発電所、精油所、金属製練工場、あるいは一般家庭から大気中に排出され、今日の植物被害の大部分を占めている。ガスは気孔から葉の中に入り組織を破壊する。葉脈の部分を残し、斑状に破壊が進み、さらに進むと葉脈を越えて破壊部分が拡大し、葉はやがて枯れて散ってします。

フッ化水素

アルミ工場やリン酸工場などから排出される。一部は水孔から大部分は気孔から葉の中に浸入し、組織を破壊する。葉の先端や縁が被害を受け、被害部と健全部の境界が明瞭に区別できることが特徴である。

塩素ガス

ソーダ工場やチタン工場から排出されることが多く、塩化ビニールの焼却時にも発生する。植物に対する有害性としては亜硫酸ガス、フッ化水素と併に、最も有害な汚染物質である。

被害症状として葉面に白色の斑点があらわれる。

オキシダント

自動車の排気中の窒素化合物や炭化水素などが、太陽の強い紫外線によって空気中で化学変化を起こし、二次的に生じた酸化力の強い物質の総称で、オゾン、PAN（パーオキシ・アシ

ル・ナイトレイト)、ホルムアルデヒドなどからなり、その主なものはオゾンであり。今日の都市化や自動車の増加にともない植物への被害も目立ち始めている。オゾンの被害は一般に葉の表面にだけ現われ、葉面に小さな斑点状のものを生じ、PANの場合には葉面が青銅色や銀色に変わる。

その他

化学工場の付近では、塩酸、硫酸ミスト、アンモニア、硫化水素、その他種々の化学物質が飛散し植物に害を与えるが、範囲もごく限られ、その殆んどが突発的に生じた事故などによるものである。

樹木の抵抗性

樹木の種類により抵抗性にも著しい違いがみられ、一般に常緑広葉樹は強く、針葉樹は弱いものが多い。

強いもの……キョウチクトウ、アオギリ、オオシマザクラ、ニセアカシア、ヤナギ、カシワ、ナラ、など。

弱いもの……カラマツ、エゾマツ、スギ、アカマツ、ケヤキ、カエデ、など

北海道に生育する樹種については、明らかでないものが多く、人工的にガスを接触させる接触試験、あるいは野外での実態調査等を行ない、樹木の抵抗性の度合などについて検討をすすめており、これらの樹種の相対的な



写真-3

抵抗性、感受性を的確に把握して、今後の緑化樹木の選択、汚染ガス監視の補助手段としての利用法（指標樹木）、あるいは汚染軽減策としての緩衝緑地帯の造成法などに関する研究が進められている。

(大気汚染プロジェクト)



道南分場

沿革

大正15年渡島支庁が旧園田牧場の一部を借りうけて民有林造林奨励苗圃として発足した。昭和21年農林省へ移管，昭和23年道に帰属，昭和26年従来の借地を買収，昭和36年隣接地4haを購入した。その間民有林造林用苗木の供給，および育苗技術の向上に貢献した。昭和41年林業試験場道南試験地として発足し，昭和44年道南分場となり，今日に至っている。



図 特色ある道南の林業地

主な樹種

スギ

藩政時代から道南地方にすこしずつ植林され，現在では約2万ha，93万 m^3 の蓄積を保有している。電柱材，一般建築材として使用され，一部は本州にも移出されており，今後は耐寒性品種の選抜を中心とした施業技術の確立，また，地場消費量の増大，利用の高度化などの対策が要望されている。

ヒノキアスナロ (ヒバ)

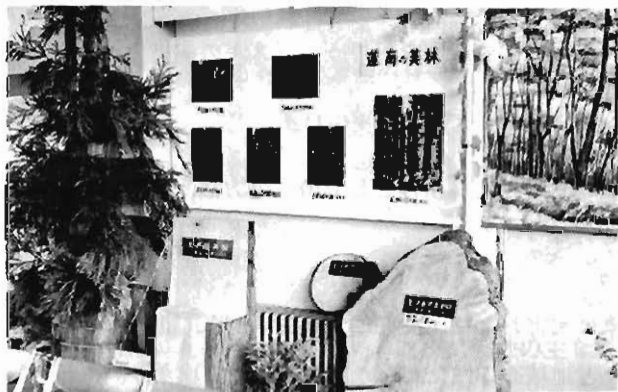
熊石を北限とし，桧山・江差を中心に分布し，蓄積約90万 m^3 ，道内スギの蓄積に匹敵する。もっぱら天然林に依存し，一部では少量のさし木造林が行なわれている。

材の性質—硬度・圧縮強度大きく，耐湿・耐朽・耐蝕性に富む。

用途—造船材，工芸用材，高級建築材，とくに心持柱，土台など。

ブナ

温帯の代表的な樹木で，道南の黒松内地溝帯以南に分布し，蓄積はおよそ1,952万 m^3 で，家具材，枕木，薪炭材，パルプ原料として使われている。拡大造林により漸次針葉樹林に転換されている。天然林の低位化が問題とされており，広大な面積を占めるブナ林の施業は，今後の重要な課題である。



写真—1

ク リ

道南地方の栽培グリは、日本グリを主としてシナグリおよびそれらの交雑種であるが、昭和44年現在で約2万1千本（5年生未満70%）あり、森・大野・仕幣・新冠などが主な栽培地となっている。

熟期が早く、食味や加工性に優れ、クリタマバチ、胴枯病などの病虫害、寒さの害に強い品種が待望されている。また山地栽培など粗放経営のための技術開発が期待されている。

クルミ

道南地方のクルミの植栽本数は、昭和44年現在で約1万3千本（うち10年生未満のもの55%）で、主として上磯・木古内・余市・蛇田・三石などに植栽されている。一般に適地選定や肥培管理が不十分なことで、授粉樹の配置など栽培技術の上で問題があり、十分な生産を上げるまでに至っていない。有望な特産樹種として地方品種の創成、栽培技術の普及徹底が切望されている。



写真-2

当面の研究課題

スギの耐寒性品種の造成

精英樹クローンおよび地域の造林地から、耐寒性個体とみなされるものを選抜する。さらに選抜木のクローンを養成し、耐寒性を検定する。

北限地帯におけるスギ造林技術確立に関する研究

地域に適応した造林および保育技術に関して調査研究を行なう（スギの病虫害の調査、林業肥料、薬剤の現地施用試験など）。

ヒノキアスナロの造林技術の開発に関する研究

ヒノキアスナロ優良個体のクローン養成および造林樹種としての活用方法、天然下種補整事業の進めかたに関する調査・研究などを行なう。

クリ地域適応品種の造成

シナグリ、ニホングリ、交雑種を対象に寒害および病虫害につよく、食味、加工性にすぐれ、豊産性で熟期が早く、親和性が大きいなど地域適応性に富んだ品種を選抜造成する。あわせて、クリタマバチなど病虫害に関する調査・研究も行う。

クルミ地域適応品種の造成

信濃グルミ系地元産優良クルミからの実生苗、および導入原種苗木から諸害に対して抵抗性がつよく、果実の形質がよく、豊産性のものを選抜する。あわせて病虫害に関する調査・研究

.....
道東試験地
.....

道東試験地設立と経過

本道民有林の造林の中心地である十勝、釧路、根室、網走支庁管内の育成林業に関する諸問題を解決するため、研究機関と林業者の有機的なむすびつきの接点を、より一層広めるため昭和42年7月道立林業試験場道東試験地として新得町に設立した。敷地は12.12haを有し昭和42～45年にかけて建物、



写真-1

苗畑整地、客土、灌水施設、堆肥場、温室など、諸施設の建設を行なってきた。この間、雑種カラマツ、改良ポプラ見本林、トドマツ地域品種、ヨーロッパアカマツ産地別展示林、樹林園の設定を行ない地域林業者と住民への造林樹種の特長についての知識をより一層深めると共に緑に親しみながら樹木を知る場を作ることに留意し、植えられた樹木の生長がまたれている。一方、道東地域の育苗、育林の過程で最大の障害となっているのは凍霜害であり、民有林において造林の大半を占めるカラマツ苗木は早霜害の解決が、早急にせまられており、昭和43年より施肥技術の検討が進められている。昭和45年からは生長調節剤、断熱発泡剤による防除法の研究にとりくんでいる。また将来予測されるカラマツ伐採跡地へのカラマツ再造林の適否は道東地域の林業者の関心事の一つであり、昭和44年より研究第2部長をプロジェクトリーダーとし、経営科、樹病科とのプロジェクト研究がおし進められている。この他今後の課題として資源の減少が心配される有用広葉樹の育成並びに施業技術の確立、カラマツ材の用途にあわせた施業技術の確立、内陸防風林の更新技術、造園的観点に立った屋敷林の造成方法などがあり、今後これら諸問題へのとりくみが急がれている。

道東試験地の主な課題

林木の寒さの害

道東地域は全般的に林木の寒さの害をうける常習地帯である。太平洋岸の十勝支庁、釧路支庁、太平洋と根室海峡に囲まれた根室支庁、オホーツク海に面した網走支庁で、4支庁共通していることは、立地的に火山灰性土壌地帯で、寡雪地帯である。気象的には十勝と網走の国境附近は、道内で最低気温にみまわれる所であり、釧路支庁沿岸部では、春先から夏季にかけて



写真-2 カラマツ苗木の早霜害



写真-3 トドマツ造林木の凍害

濃霧は顕著である。4支庁とも秋季は晴天が続き、日中と夜間の温度較差が大きいのが特徴である。

林木の寒さの害で、十勝管内に発生する主な被害は、春のトドマツ開芽期の晩霜害と、秋の生長休止期前後のカラマツ苗木の早霜害による被害が大きい。とくに道東4支庁管内は民有林のカラマツ造林では、北海道で最も多く造林されており、その成績も著しくすぐれているので、カラマツ生産地帯として期待がかけられている。道東試験地では、道東地域のカラマツ育苗の阻害因子である秋の晩霜害防除の技術を確立するため、生長調節剤による化学的被害防除法や、断熱剤の発泡噴霧方式による物理的な被害防除法の技術について検討している。

釧路支庁管内では、主としてトドマツ、アカエゾマツの寒風害による被害が大きく発生しており、最近では昭和42年春に発生した被害は甚大であった。さらに、カラマツ造林地のⅡ令級に達した造林木や、ポプラの幹の凍害による被害が増大している。

寒風害による被害は、雪の少ない年の苗畑のトドマツ、アカエゾマツ苗木と造林地では4年生位までの若令木に限られており、トドマツの被害の程度は種子の産地によって差異があり、地元産か、道東地域の産地のものほど被害が少なかった。造林地では、斜面の方位によって、南斜面は比較的被害が大きく、北斜面は被害が少ない。南斜面では、樹下植栽したところの上木で保護されているところはあるていど被害は緩和される。

根室支庁管内は釧路管内と同様であるが、釧路支庁管内に比較して被害の程度は少ない。

網走支庁管内は、内陸部は凍霜害による被害が多く、沿岸部ほど寒風害による被害が多い傾向が認められる。立地条件も火山灰地帯と埴土地帯に大きく分けられるところから、地域ごとに被害のあらわれかたが大きく変る管内のように考えられる。

カラマツ林と施業技術の検討

拡大造林の推進にともないカラマツの造林地は民有林造林地の大部分を占めている。これらの大部分は戦後に造林されたもので、間伐期をむかえており、間伐技術の検討の必要がきげば、また収穫された後の利用まで考慮して施業する必要がある。20～30年で伐採利用する場合、



写真一 4

未熟材特有の「ねじれ」、「まがり」等の欠点があられ、構造材としての利用が困難であり、その多くが価値の低いチップ材として用いられている。しかし40年以上になるとこれらの欠点も少なくなり、構造材や合板材としての利用が可能となるといわれているので、今後カラマツも長伐期を考慮した施業技術が必要である。

有用広葉樹の育成

拡大造林事業の目的の大きなものは、生産性の低い二次林などの広葉樹を生産性の高い針葉樹へ林種転換することであった。このため広葉樹の中、小径木は無条件皆伐といった傾向があり、その跡にはカラマツ、トドマツなどの針葉樹の一斉林に置きかえられている。北海道の有用広葉樹は世界的にみても貴重なものであり、将来の需給対策のためにも有用広葉樹の保続と二次林の合理的施業技術が必要である。

道北試験地

道北試験地の出発

道北北部のあらまし

道北北部の開発の歴史をみるには資料に乏しく明らかでない点が多いが、かつてはこの地域に豊富な資源を求めてひとびとが群がった。そしてこれらの資源を対象として地域産業が開発されたのである。この開発の歴史が、

やがて海岸近くの森林資源をこかつさせ、たび重なる山火事により低位生産地帯となってしまったところが多くみられるようになったのである。

道北北部地域は他の地域に比較して、気象条件、土壌条件の自然的悪条件が多い。年平均気温が他の地域と比較して低く林木の生産期間の積算温度もかなり低い。また、海岸線が長く沿岸には流氷の滞留や接岸がみられ、そのため気温の低下をまねき、日照時間の短かいことに加えて、特殊な海洋性気象となっている。さらに林木の生長に影響する塩風や季節風が強い。この地域の土壌は粘性が強く、通気通水性の乏しいものが多く、河川の流域には広範な過湿泥炭地が分布し林業上からみても低位生産地帯となっている。

これら低位生産地帯の林業技術体系の確立をはかる目的から、現地民有林と密着した形で試



写真一 1 道北試験地庁舎

験研究活動を展開するとともに、普及センターとして活用されるために昭和45年7月道北試験地が中川町に設置された。

道北試験地の出発…



天然の樹林の伐り残し跡は一面のヤブ生地



種樹材はマツはヤブ高し、こゝから風通し、林間日照



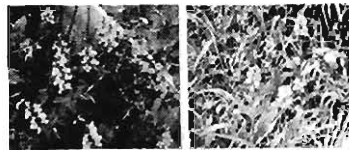
宗谷地方のトドマツ天然林は沢尻ナカノド（ヤブエダ）等に保護され、あるいは火害に悩まされている。



防犯林の設置跡はヤブ、伐り残し跡のヤブ生地



クマツに保護の原野地も比較的ヤブ生地



北道、吹込ヒタタイハチのワザン作り

写真—2

道北試験地の研究計画

道北試験地は道北地域の育成林業の技術研究ならびに普及事業のセンターとしての活動を行うが、主な研究テーマは

1. 天北地帯の造林技術の研究
2. 北方天然林施業の研究
3. 防災林の研究

などであるが具体的には調査と試験について今後の造林の進め方あるいは天然林の施業方法について継続して研究することが望ましく、たとえば植栽樹種の研究では生長が早いとか、経済的になりたつということは絶対的に必要因子であるが、悪条件の多いこの地帯では各林分の立地条件に応じて適地適木の造成方針を第1に考えねばならない。これらの条件として、温度の激変に耐えうること、塩風や風衝に耐えうること。泥炭地に適応することなどが考えられる事項となるが、これらの基礎的資料として示唆されるものがあれば地域林業の体系も確立できるのである。

このような意味から今後の研究として具体的には

- 1) 造林地の現況調査
- 2) 造林地の地帯区分
- 3) 特殊土壌地帯の造林法
- 4) 風衝地帯の造林法
- 5) 海岸林の造成法
- 6) 現地適応樹種の育成
- 7) 造林地の施業技術
- 8) 天然林の施業技術
- 9) 広葉樹天然林の施業技術
- 10) クローンの二次検定
- 11) 現地適応樹木園の造成

などで、道北地帯の林業が寒地酪農業経営と調和された形で魅力ある道北を築き上げるために、早急に解決しなければならない研究事項が山積しているのである。

第三期北海道総合開発計画林業部門と当場の試験研究

生産と生活が調和する豊かな地域社会の建設 **第三期北海道総合開発計画林業部門の概要** 高度の生産性と公益性をもつ北方林業の

施策

総事業費 956,352 (千円)

事業名	事業費	割合
高度生産性林業の推進と林産業の振興	790,187	82.6%
人工造林の促進	924	0.1%
天然林の保護	352	0.4%
優良林の保護	24,330	2.5%
工業用材の育成	4,649	0.5%
森林保護の強化	2,629	0.3%
伐採作業の促進	2,780	0.3%
森林管理の改善	9,735	1.0%
林産業の振興	381,771	40.0%
森林保護の強化	2,629	0.3%
森林管理の改善	2,671	0.3%
優良林の保護	24,330	2.5%
工業用材の育成	4,649	0.5%
森林保護の強化	2,629	0.3%
伐採作業の促進	2,780	0.3%
森林管理の改善	9,735	1.0%
林産業の振興	381,771	40.0%

山形林業生産地帯

この地帯は、地味に生産組織が整い、近代化の経営が進みやすい条件を有し、大規模経営も進めやすい条件をもっている。また、国有林、公有林などが多く存在しているため、重点的な開発投資により急速に生産力を高め、生産工業の原料供給地としてその整備をはかる。

構造-地帯別林業開発の展開

地帯別面積

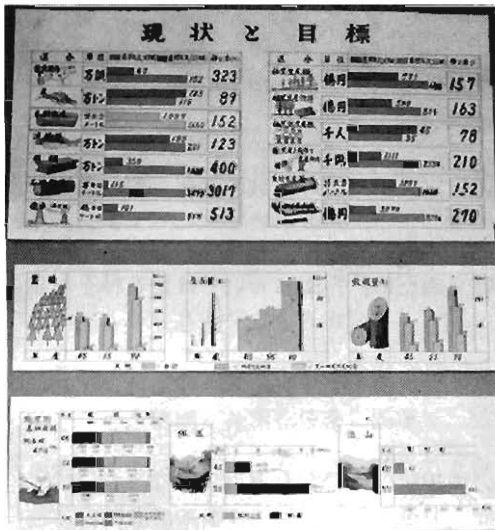
地帯	面積 (千ヘクタール)
山形	43,274
道南	15,716
道北	16,316
道東	17,716
道庁	15,716
道南	15,716
道北	16,316
道東	17,716
道庁	15,716

林業生産地帯

この地帯は、一般に生産組織が整い、近代化の経営が進みやすい条件を有し、大規模経営も進めやすい条件をもっている。また、国有林、公有林などが多く存在しているため、重点的な開発投資により急速に生産力を高め、生産工業の原料供給地としてその整備をはかる。

当場の試験研究

この地帯は、一般に生産組織が整い、近代化の経営が進みやすい条件を有し、大規模経営も進めやすい条件をもっている。また、国有林、公有林などが多く存在しているため、重点的な開発投資により急速に生産力を高め、生産工業の原料供給地としてその整備をはかる。



昭和27年から37年までの第一期北海道総合開発計画、昭和38年から45年までの第二期計画は、いわば「産業基盤の整備」を中心として組まれたものであったが、46年度から10カ年計画として実施される第三期北海道総合開発計画は「生産と生活が調和する豊かな地域社会の建設」を目標としている。これに沿って林業関係では「高度の生産性と公益性をもつ北方林業の確立」というテーマをもとに、(1)地帯別林業開発の展開、(2)高生産性林業の推進と林産業の振興、(3)森林公益機能の充実強化の三つを柱にしてつぎのような施策を想定している。

地帯別林業開発の展開

林業生産地帯

この地帯は一般に生産組織が整い、近代化の経営が進みやすい条件を有し、大規模経営も進めやすい条件をもっている。また、国有林、公有林などが多く存在しているため、重点的な開発投資により急速に生産力を高め、生産工業の原料供給地としてその整備をはかる。

